

英語不定冠詞の 教育内容と指導過程の構築に向けて

町田佳世子 (札幌市立大学)

Abstract

In order to propose a new instruction framework of indefinite articles for Japanese learners of English, this study examines three dimensions related to the uses of English indefinite articles, namely, COUNT/MASS dimension, SINGULAR/PLURAL dimension, and EXTENSIVITY dimension. The system of indefinite articles constitutes *a (an)*, unstressed *some* (as well as unstressed *any* as its variant), and an invisible article, which is called zero article. This study argues that the COUNT/MASS dimension should incorporate \pm divisible, \pm merge-able, and \pm homogenous contrasts as its dichotomous features when it is taught to Japanese learners of English so that they can distinguish count entities from mass entities. The SINGULAR/PLURAL dimension should be treated as a sub-dimension of COUNT. The zero article is contrasted with *a (an)* and the unstressed *some/any* in the EXTENSIVITY dimension. Based on this framework, the study organizes instructional steps of these dimensions. It is argued that the instruction of the indefinite articles should begin with the COUNT/MASS dimension, on which *a + N*, *some + N*, *some + Ns* are contrasted and explained. Then, the instruction continues to the EXTENSIVITY dimension where *a (an)* and the unstressed *some/any* have a quantitative meaning, whereas the zero article has a categorical meaning.

1. 研究の背景と目的

英語の冠詞は、英語学習の全くの初期段階から現れる。学校教育だけでなく、未就学の幼児向け教育教材でさえも **a car, an apple** のように冠詞が生起した表現が用いられる。中学校に進むと、**a** は「1つの」という意味であり、「あるものにはじめて言及する場合は **a**, 次からは **the** を使う」と説明されることが多いだろう。そのような説明が冠詞の本来の意味・機能の理解を妨げているとする意見を目にすることもある。しかしそのような指導内容は、全く的外れなのではなく、確かに **a** は「1つの」という意味を弱いながらも保持しているし、言語的文脈の中で、**a** と **the** が上記のように使われることは言語的事実である。日本人学習者にとって冠詞の習得が困難な要因は、最初の段階で **a** や **the** について不十分な説明が行われるからではなく、むしろ、その後の何年にもわたる英語学習の期間において、冠詞体系全体の教育がほとんど行われず、最初に出会った、**a** は「1つの」という意味で初出のときに使われ、**the** は 2 回目以降に使われるという説明だけが、なかば恒久的に学習者の記憶に残ったまま英語学習を終えてしまうことにあるのではないかと考える。そこで本稿では、英語学習のある時期において、冠詞体系の指導をとりたてて行うことにより、英語の冠詞に対する理解が進み、言語使用においてより適切な冠詞の使用が実現するのではないかと考え、とりたてて行う冠詞体系の指導の教育内容と指導過程を、特に不定冠詞に焦点をあてて考察することを目的とする。

本稿で英語学習のある段階として暫定的に想定しているのは、大学・短期大学の学生、または高校生で、特にライティングや文法に焦点をあてた授業での扱いを念頭においている。冠詞の選択が特に問題となるのは、読解やコミュニケーションに焦点をおいた授業のときよりも、学生・生徒自らが英語を書くときであり、そのときには、冠詞の使い方によっては伝えたいように伝わらないことがあることに意識が向きやすいと考えるからである。暫定的にと記したのは、その段階でとりたてた指導を行うとすれば、英語学習の最も後半の段階まで冠詞体系の理解をあいまいなままで学習を進めることになるという問題が残されたままになるからである。最終的には、中学校で「数えられる名詞・数えられない名詞」という区別がでてくるときに **count/mass** の区別とそれに伴う不定冠詞や名詞の数の指導を行うなど、中学・高校のカリ

キュラム全体のどの段階で冠詞体系の教育内容のどの部分を組み込むことが可能かを検討していかなければならないと考えている。しかしまず、なんらかの冠詞の知識を持ちながらも適切に使えないでいる学習者が、本稿で提案する教育内容や指導過程、そしてそれをもとに作り上げていく指導方法によって既存知識を再構築しながら本質的な理解に到達できるかを明確に評価することが必要と考え、本稿で念頭におく対象者を、大学・短期大学・高校においてライティングや文法の授業を受ける学生・生徒とした。

本稿で特に不定冠詞に焦点をあてるのは、定冠詞を用いるか不定冠詞をもちいるかの判断と、不定の場合どの不定冠詞を用いるかの判断は、異なる領域の判断であり、かつどの不定冠詞を用いるかの判断が、定・不定の判断に先行すると考えるからである。

定か不定かの判断は、談話の領域において行われる。すなわち、聞き手が指示対象を十分特定できるかどうかによって、定冠詞を用いるか用いないかが決まってくる。そして聞き手が指示対象を十分特定できるかどうかは、発話の場面や言語的文脈に依存しているのである。一方で冠詞の使用に関わる他の次元、すなわち COUNT/MASS、SINGULAR/PLURAL、EXTENSIVITY (Chesterman, 1991:25-29) の次元は、指示対象となるものやことの「存在様態」(織田, 1972:28)や、その言語を話す人々にとって意義があること、すなわち「話題になる事物の性質とか、英語を母国語とする人々がその事物について抱く考え方のために、あるいは歴史的な理由で」(クローズ, 1980:49)判断される意味論的判断である。定・不定の判断は、どの冠詞を用いるかの判断ではなく、すでに話者と指示対象の間で決定した不定名詞句を、定の名詞句として聞き手に提示するかどうかの判断に他ならない。従って「不定冠詞形による、ある一定の姿・形を持つ存在としての記述が了解されて初めて、定冠詞形による指示と同定が可能になる」(織田 2007:48)のである。そのため「定冠詞は不定冠詞の認識を前提としており・・・2つの冠詞は、段階を異にする、異なる働きの文法標識」(織田 2007:48)と捉えることが適切であると考えられる。そうであるからこそ、定冠詞 **the** は「文脈によってすべての名詞の前に冠することができ」(安井 2014:32)、その名詞句の指示作用が定であるという情報以外の情報、例えば、その名詞句の指示対象が **count** なのか **mass** なのかについては、**the** 自身は何も責任を担わずにいられるのである

1)。

このように、聞き手の知識や発話の場面という談話領域の要素が判断の根拠となる定・不定の区別と、指示しようとする対象はどのような存在様態であるのかという意味論的判断を行う count/mass などの区別を、異なる段階として分けることは、指導においても重要であると考えられる。従って、本稿では、まず指示対象の存在様態の判断を標示する不定冠詞に焦点をあて、不定冠詞の意味・機能に関わる COUNT/MASS の次元、SINGULAR/PLURAL の次元、そして EXTENSIVITY の次元の内容と構造を考察することとする。日本語の名詞句にはない count/mass の区別、数の区別、そして可能な指示範囲の全体集合か部分集合か、言い換えれば種類としての指示か数量的存在としての指示かの区別は、いずれも英語学習者にとって簡単な区別ではない。従って、不定冠詞の意味と機能に関する教育内容を矛盾のないように構築し、学習者の冠詞の理解や認識の形成に合致するように指導過程を構築することは、英語学習者が冠詞を正しく、自らの伝えたい内容を伝えたいとおりに伝えていくために不可欠と考える。

本稿では、不定冠詞にどのようなものがあり、それらは COUNT/MASS の次元、SINGULAR/PLURAL の次元、そして EXTENSIVITY の次元でどのように対立しているのかを考察し、不定冠詞の指導の内容と過程を考えていくこととする。

2. 不定冠詞の種類

伝統文法においても英語教育の文法書においても、英語冠詞を a (an), the, zero 冠詞の 3 種類として、冠詞の意味や機能を論じたり、共起関係によって名詞を分類する研究は少なくない (Jespersen, 1924; Christophersen, 1939; クローズ, 1980 ; Leech & Svartvic, 1975; 織田, 1972; 2002; 2007)。例えば、Christophersen (1939:23-25) は、zero-form, a-form, the-form と共起するかどうかによって名詞を分類し、織田(2007:7) は、3 つの冠詞と名詞の語尾の形式により、中学校英語検定教科書の中で用いられる名詞が以下の 5 つの形に区別されると述べている。

(1) 織田(2007:7)

1. 無冠詞ゼロ数形 ‘ ϕ —— ϕ ’ 形: tennis, music, breakfast
2. 無冠詞複数形 ‘ ϕ ——s’ 形: pictures, sports, flowers
3. 不定冠詞単数形 ‘a —— ϕ ’ 形: a TV, a soccer game, a question
4. 定冠詞単数形 ‘the —— ϕ ’ 形: the piano, the guitar
5. 定冠詞複数形 ‘the —— s’ 形: the Yankees, the Beatles

クローズ(1980)は、a, the, zero と名詞の数の組み合わせで、冠詞の用法を6つの相にまとめ、「英語のあらゆる名詞は、可能性としては、以上の6つの観点のどれからでも考察することができる」が、「実際には一部の名詞が他の名詞よりも容易に、また一層しばしばこの6つの位置のすべてを満たすことができる」としている。その上で、6つの相のどれに生起するかで、名詞を固有名詞 (Proper Noun)、個体名詞 (Unit Noun)、質量名詞 (Mass Noun) に分類している。

(2) クローズ(1980:48-49)

- 相1 apple, language 一般的な概念、物質または物質のサンプル、
無標形
- 相2 apples, languages 一般的な概念、ただし個体を全部集めたものとして見たもの
- 相3 an apple, a language 全体から選ばれた1つの、完全かつ不特定の個体
- 相4 apples, languages これらの個体の2つ以上—しかし、まるまる全部ではない
- 相5 the apple, the language 聞き手が確認できると話者が想定する1つの例—完全な個体か一部のサンプルのいずれか
- 相6 the apples, the languages 2つ以上の確認可能な個体 (しかし2つ以上の確認可能なサンプルではない)

このように冠詞として3種類を想定する場合は、それらの意味や機能は、定・不定の次元、COUNT/MASS の次元、そして SINGULAR/PLURAL の次元で互

いに対立していることになる。しかし a (an), the, zero 冠詞の3つだけで冠詞体系を構成しては、次のような問題が生じる。1つは、zero + N (*cake, language* など)と zero + Ns (*cakes, languages* など)が、COUNT/MASS の次元において、前者は mass で後者は count の解釈を持つにもかかわらず、同じ zero 冠詞が使われているのはなぜかという間に答えることができないことである。2つ目は、a + N の複数相当語句 (plural equivalent)が zero + Ns ではない場合があることである。

(3) I've just bought *a melon*.

(4) I've just bought ?*melons*.

(5) I've just bought *MELONS* (but not grapes).

(Quirk et al., 1985:274-275)

(3) の *a melon* が複数になった場合、(4)の zero + *melons* は、*a melon* の複数相当語句とは言えない。なぜなら(5)のように、他の種類との対比が音律的に含意されているときを除いては不自然だからである(Quirk et al., 1985:275)。Zero + Ns が a + N の複数相当語句ではないことは、以下の例でも示すことができる。

(6) Minnie wishes to talk with *a young psychiatrist*.

(7) Minnie wishes to talk with *young psychiatrists*.

(Carlson, 1977:417)

(6) の *a young psychiatrist* は specific/non-specific の読みについて曖昧であるが、7)の *young psychiatrists* のように zero 冠詞を伴う場合は、non-specific の読みだけが可能である。従って指示的名詞句 (referring noun phrase)の指示対象の specific/nonspecific における曖昧性の有無という点で、a + N と zero + Ns は異なる性質を持っていると言える。これらのことから、英語の冠詞として、a(an), the, zero 冠詞の3つだけを想定しては、2つの疑問、なぜ count にも mass にも zero 冠詞が使われてしまうのか、そして a + N の複数相当語句が zero + Ns でないとするれば、複数相当語句は何な

のかに答えられず、zero 冠詞の機能も十分説明できないことになる。

では(3)の *a melon* や(6)の *a young psychiatrist* の複数相当語句は何だろうか。

(8) I've just bought *some melons*. (Quirk et al., 1985:274)

(9) Minnie wishes to talk with *sm young psychiatrists*².

(Carlson, 1977:417)

強勢のない *some* を伴うと (*səm*, *s'm*, *some*, *sm* などと表記されることもあるが、本稿では以下特別な断りがない限り、強勢のない *some* を *some* と表記する)、(8) では *a melon* の複数相当語句となり、また(9) では *a young psychiatrist* と同じように *specific* の読みと *non-specific* の読みの両方を持つ。従って、*a + N* の複数相当語句は、*some + Ns* と言える。

また、(10)～(14) が示すように、*a(an)*, *some*, *zero* 冠詞を比較すると、*a (an)* と *some* は数量的な意味をもち、*zero* 冠詞は種類またはカテゴリカルな意味を標示することがわかり (Quirk et al., 1985:275, Celce-Murcia & Larsen-Freeman, 1999:278, クロース, 1980:42)、*mass* の解釈を持つ名詞句 *zero + cake* と *count* の解釈を持つ名詞句 *zero + cakes* に同じ *zero* 冠詞が生起している理由も明確になるのである。

(10) I'd like an apple. (*an + N* 数量と種類が強調される)

(11) I'd like some apples. (*some + Ns* 数量と種類が強調される)

(12) These are apples. (*zero + Ns* 種類が強調される)

(13) This is water. (*zero + N* 種類が強調される)

(14) May I have some water? (*some + N* 数量と種類が強調される)

(クロース, 1980:42 から抜粋)

これらのことから、本稿では、不定冠詞として、*a (an)* と *zero* 冠詞に加えて、*some* およびその *non assertive variant* (否定文や疑問文など断定が行われない場合の変異形) である強勢のない *any* (以下、*some* と表記する場合は、強勢のない *any* も含むこととする) を含めることとする。

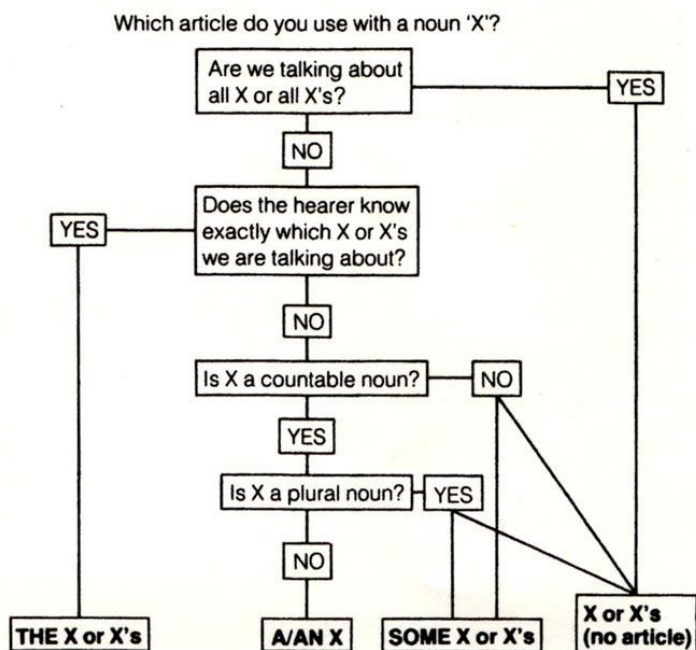
3. 不定冠詞の意味と機能

3.1 冠詞に関わる次元

不定冠詞 *a (an)*, *some*, zero 冠詞がどのような意味や機能を持つかは、各不定冠詞が互いにどのような次元において対立し区別されるのかを見ていくことで明らかになる。冠詞体系全体としては、定・不定の次元での対立も含まれるが、本稿は不定冠詞に焦点を限定しているため、定・不定の次元は考察から除くこととする。

不定冠詞 *a (an)*, *some*, zero 冠詞の意味・機能は、これまでの冠詞研究において、COUNT/MASS の次元での区別、SINGULAR/PLURAL の次元での区別、そして EXTENSIVITY の次元での区別によって説明されてきた。(15)の図は、それらの次元の構造を示している。本稿ではこのような次元構造に対して、冠詞指導という観点から問題点を指摘し検討することにより、冠詞の教育内容としてより適切で新しい次元構造の提案を試みる。

(15) Swan (1984:44)



3.2 COUNT/MASS の次元

本節では、COUNT/MASS の次元について考察する。その前提として、まず count/mass の対立が何の対立であるかを述べ、引き続いてこの次元で count/mass がどのように区別されるかを考察する。

3.2.1 Count か mass かは名詞の区分ではない

Count か mass かは、伝統的に名詞の区分として用いられることが多かった。文法書においても教科書においても、名詞は、数えられる名詞、数えられない名詞のように分類され、それによって共起する冠詞が決まるという考え方である。しかし、本稿では、count/mass は名詞の区別ではなく、その名詞が実際に使用されたときの解釈の区別 (Huddleston, 1984) という立場をとる。

もし count/mass の区別を、この名詞は count noun、この名詞は mass noun と分類するとすれば、多くの名詞が count としても mass としても用いられるという言語事実をどう扱うことになるだろうか。ある count noun (例えば a lamb) が mass noun (some lamb) として用いられたとき、それを転換 (conversion) として扱うこともできる。しかし 1 つの名詞に countable と uncountable の 2 つの語彙素 (lexemes) を設定するとすれば、英語の語彙素の数は膨大なものになってしまうだろう (Huddleston, 1984:247)。それに対して、Huddleston(1984)や Allan (1980)は、名詞の可算性 (countability) という概念は純粋に統語論的なものであり、様々な限定詞 (determiners) との共起可能性によって、ある名詞は他の名詞よりもより可算性があるという性質のものであると考えた。たとえば、語彙素 **cake** も **book** もあるときは a (an) と共起し、あるときは単数形式で zero 冠詞と共起できるので、可算性のレベルは同じとなる。そして a cake、a book と使用された場合は count の解釈をもち、cake、book の場合は mass の解釈をもつことになる。本稿で count/mass というときも、名詞が count か mass なのではなく、その名詞が使用されたとき、指示対象が count の存在様態をもつ、あるいは mass の存在様態をもつ、という意味で使用することとする。

3.2.2 COUNT/MASS の次元

冠詞を学習する際に日本人英語学習者を戸惑わせることの 1 つに、指し示すものやことが count か mass の判断をしなければならぬことがある。不

定冠詞は、count/mass の区別の結果を標示しているのので、指示しようとする対象が count としての存在様態を持つのか、mass としての存在様態を持つのかを判断できるようになることが、不定冠詞の理解に不可欠となる。この次元での判断がむずかしい理由として様々な理由が挙げられているが、もっともよくとりあげられるのが、日本語にはない発想ということだろう。しかしこれは多少誤解を招く表現でもある。なぜなら日本語にないのは、count/mass の判断を言語的に標示する必要性である。そのため count/mass 判断が言語使用の際に習慣化・意識化されていないのであり、決して日本語話者が count/mass の発想を持っていないということではない³⁾。日本人英語学習者が冠詞を使用する際に count/mass の区別に戸惑うのは、冠詞教育の場で、どのような存在様態が count と解釈され、どのような存在様態が mass と解釈されるのかを、適切な教育内容と指導により、十分に教えられてこなかったからではないかと考える。

COUNT/MASS の次元において、count と判断される対象は、「(その名詞が) 境界づけられた、もしくは個体化されたという解釈」を持ち「単一体として、離散的な対象と思われ、描かれ、知覚される」(Huddleston, 1984:246)、「独自の個体としての形、あるいは始めと終わりを持つ閉じた形、そのような自己完結的な様相を備えている」(織田,1982:28)、「個としての姿・形あるいはまとまりのあるもの」(織田,2007:23)、「離散的で数えることが出来る存在」(Downing, 2015:365)、「何か単一であり、それ自身で完結している物、すなわち一個のものというか、同じ種類の一族に属している一単位というような考えを呼び起こすもの」(Christophersen, 1939:26 訳はクリストファセン・一色訳述 1958:9 より)「他のものとはっきり区別される輪郭をもつ独立した個体」(安井, 2014:35)「他者と区別される明確な境界線」(安井, 2014:36)「恣意的な分割ができない」(Wierzbicka, 1988:506)、「同じ種類のより小さい部分に分割できないという意味で原子的(atomic)」(Huddleston & Pullum, 2002:335)と説明されてきた。一方で mass については、「いくら分割してもその特性に変化を生ずることがない」(安井, 2014:35)、「連続していて、空間的、時間的に無限に広がっているものとして考えられるもの」(Christophersen, 1939:26 訳はクリストファセン・一色訳述 1958:9 より)、「未分化な統一体」(Huddleston,1984:245-8)、「恣意的な分割が可能」

(Wierzbicka, 1988:506)と説明されてきた。いずれも共通しているのは、count の場合は、他のものと区別されるなんらかの明確な境界をもつ個体もしくは単位(unit)であること、そして mass の場合は「連続し、分割可能であること」である。

このような count/mass の区別は、たしかに count/mass の本質的特徴であることに違いはないが、指導という観点から見ると、まだ抽象的な説明にとどまっているように思える。たとえば、境界づけられるとか境界線をもつのは、決して count の存在だけではない。名詞句 *some soap* や *some cheese* は mass の解釈を持つが、これらの名詞句によって指示される石けんやチーズも現実世界の中では他と空間的に境界づけられている。従って学習者は石けんやチーズは count の存在物に思ってしまうだろう。名詞句 *an apple* により指示される個体としてのリンゴは count の存在物であるが、その中身・構成物を指示する場合は mass の存在になることが文法書や指導の際によくとりあげられる。しかし現実世界では個体としてのリンゴもまた分割可能な存在であり、そうであれば mass の基準にあてはまることになる。さらに *furniture* や *crockery* なども、それらを構成するのは一つ一つは明確な境界をもつ机、椅子、ベッドなど、もしくは小皿、大皿やカップなどであるから、*furniture* や *crockery* の指示対象が mass の存在様態であることは直感と反することになる。

このように count/mass の対立を「境界づけられているか、連続しているか」の対立と説明するだけでは、腑に落ちる理解にはつながらない。そこで、境界づけられているとか、個体・単位としての存在とはどういうことなのかを、さらに深く考えていく必要がある。それには count という用語に立ち返り、数えるということ、数えられるものと認識・知覚されるものとは何かという観点から考えてみる必要がある。

そもそも人間の認識の中で、数えられるもの、数えられないものとはどのようなものなのだろうか。数学者の遠山啓は分離量と連続量について次のように述べている。「分離量はそのなかにある1つが、これ以上分けられないこと、そしてお互いに独立していて、つながらないということが条件です・・・これに対して連続量というのは・・・無限に分割が可能です。分割が可能でする反面、いくらでもつなげることができます・・・このように無限分割可

能性と合併可能性を持ったものを連続量とよびます」(遠山, 1972:16)⁴⁾。さらに「分離量と連続量のちがいは決して絶対的なものではない。何ヤールかの布地というときは連続量だが、それを仕立てて何着かの服にしたら、それはもう分離量と考えなければならない」(遠山, 1959:24)と、同じ対象が、その存在様態の違いによって、連続量にも分離量にもなり得ることも述べている。これを英語の count/mass の区別にあてはめると、count の「境界づけられている」とか「個体」ということは、分割ができないだけでなく、互いに独立していて、つながらないということとなる。また mass の「連続し、分割可能であること」とは、質的な変化を伴わずに無限に分割が可能であると同時に質的な変化を伴わずにいくらでも合併が可能ということになる。したがって、COUNT/MASS の次元には、その下位次元として、 \pm divisible (arbitrarily divisible)の対立と \pm merge-able の対立が置かれることになる。

すでに述べたように、学習者が count/mass の区別で戸惑うもう1つの言語現象が、furniture や crockery などが mass の解釈をもつことである。ここでも数えることのできる要件に立ち戻って考えてみたい。数えるためには、指示対象の個性・単位性だけでなく、それらの個体が同じ種類のものであることが要求される。須田(1993)は、算数・数学教育において、分離量の抽象過程において獲得されなければならないいくつかの段階に言及する中で、数えることが成立するためには、まず『或るもの』を未分化な世界から質によって切り取り個物の世界とする必要」(1993:40)があり、次にその「或るもの」は「他のもの」との関係において異なってはいるが、それらを包括するような集合に属することができるという点で同一であることを見いだせることが必要であると述べている(須田, 1993:40)。すなわち、個体として分離しているだけではまだ数えることは達成されず、それらが同種のものとしてひとつの集合をなすことが、分離量を理解していく過程で不可欠であるということである。言語学の領域でも Wierzbicka (1988)が、Frege による Spinoza の引用部分、「数という点でものを考えるのは、それらが共通の属に還元された後である」に言及し (Frege, 1950:62を Wierzbicka, 1988が引用)、数えることには、分離された対象の存在だけでなく、それらの分離された対象が同じ種類であるという要件が必要であることを述べている。このように数えることの要件に立ち戻って furniture を考えると、それを構成する個々

のテーブルや椅子はそれ自身それ以上分割や合併をできない個性を持ってはいるが、互いの同種性がないため、*one furniture, *two furnitures のように数えることができないことになる。このことを COUNT/MASS の次元に適用すると、その下位次元として \pm homogenous の区別が含まれることになるだろう。

数学における分離量と連続量の違いは日本語・英語にかかわらず普遍の概念であり、日本語話者である私たちも算数・数学を学んでいく中で身につけていくことのできる概念である。従って count や mass をこのような観点から指導することは、日本人学習者の count/mass の理解に貢献するのではないかと考える。

ここまでのことをまとめると、COUNT/MASS の次元は、指示対象の存在様態が、 \pm divisible, \pm merge-able, \pm homogenous かどうかで count か mass の判断が行われる次元ということになる。

3.3 SINGULAR/PLURAL の次元

名詞句の中で単数・複数の区別を標示するのは冠詞ではなく名詞の語尾である。しかし冠詞と名詞の共起関係とその指示作用を論ずるにあたって、必ず SINGULAR/PLURAL の次元は言及され、典型的には、(16)のように示される。

(16) Quirk et al. (1985:253)

		COUNT	NONCOUNT
SINGULAR	definite	the book	the furniture
	indefinite	a book	furniture
PLURAL	definite	the books	
	indefinite	books	

冠詞の指導において、singular/plural の対立が組み込まれる場合は、おおむね、指示対象が count の場合は1つか1つより多いかを判断し、1つなら名詞を単数にして a + N, 1つより多い場合は名詞を複数にして some + Ns や zero + Ns を用いる、指示対象が mass の場合は数えることに意味がないのであるから（あるいは数えられないものなのだから）名詞は単数のままで some + N や zero + N とする、という説明が多いだろう。しかし、それでは

mass にも「1つ」という概念をあてはめることになり、本来の mass の特徴を曖昧にしたり誤解を生み出すおそれがあるのではないだろうか。

Mass の指示対象を、複数との対立である単数で標示する不自然さに対して、織田(2007:7)は、mass の場合の名詞語尾をゼロ数形とし、count の場合の単数形とは異なる呼び方で呼び区別している。

(1) (再掲)

1. 無冠詞ゼロ数形 ‘ ϕ —— ϕ ’ 形 : tennis, music, breakfast
2. 無冠詞複数形 ‘ ϕ ——s’ 形 : pictures, sports, flowers
3. 不定冠詞単数形 ‘a—— ϕ ’ 形 : a TV, a soccer game, a question
4. 定冠詞単数形 ‘the—— ϕ ’ 形 : the piano, the guitar
5. 定冠詞複数形 ‘the——s’ 形 : the Yankees, the Beatles

実際の指導において、ゼロ数形という呼び方を用いないとしても、言語事実として、mass として用いられた名詞、例えば *May I have some water?* の *water* が単数形の語尾と同じ形をしていることについては、Christophersen (1939)が(17)のように述べていることに留意して指導内容を構成することが望ましいのではないかと考える。

(17) Christophersen (1939:27) (訳はクリストファセン・一色訳述, 1958:10より)

単数とか複数とかいう考えは純粋に心理的な立場からは連続語 (continue-words) には縁のないものである。英語にはこの二種の数しかないので、連続語がそのうちのどちらかを選ばねばならないが、単数の方が自然であるから、多くの場合単数の形をとる。

これらのことをもとに、本稿では、singular/plural の区別は、指示対象が count と判断された場合のみ生じる区別であると考え。指示対象が count であれば singular/plural の判断が行われ、その結果により名詞は単数形か複数形のどちらかとなる。一方で指示対象が mass と判断されたとき、その特質上、singular/plural の区別は行う必要がない。従って、SINGULAR/PLURAL

の次元は、COUNT/MASS の次元において COUNT と判断された先にある下位次元となる。Mass の解釈をもつ名詞に単数・複数の対立はないことをふまえて、単数形と同じ形式を用いるのは、英語という言語が2つの形式のみという選択肢の中からどちらかを選ばなければならなかった結果であるとの立場をとるのである。

3.4 EXTENSIVITY の次元

EXTENSIVITY の次元は、(15)の図の ‘Are we talking about all X or all Xs?’ のボックスに相当する。Chesterman (1991: 25-27)が、Guillaume の理論そしてそれを英語に適用した Hewson(1972)をもとに、有形の冠詞 a (an), the, *some* が、表層的には無形の冠詞 (本稿では zero 冠詞が相当する) と対立する次元として冠詞体系の考察に取り込んでいる。Hewson (1972)は、zero 冠詞の意味を「ある名詞がそのもっとも抽象的な意味で用いられていることを示している。厳密に言えば、zero 冠詞が意味するのは、意味内容 (significate) がその潜在能力と同等の範囲をもっているということ」(Chesterman, 1991: 26 Hewson, 1972 からの引用) とし、有形の冠詞を付け加えることは「その概念に形を与え、離散した存在物もしくは存在物の集合として呈示することである (Chesterman, 1991: 26 Hewson, 1972 からの引用)」と述べている。

この次元はこれまでも複数の言語学者が異なる呼び名で取り上げてきたが (Chesterman, 1991:27)、英語教育の文法書でも、表現はそれぞれ違ってもはいても言及されてきた。例えば、「その名称で呼ばれる全部か、全部のうちの1つ、つまりある種類に属するものの1つ」(クローズ, 1980:42)であったり、タイプやクラスの解釈と数の制限を課す解釈 (Celce-Murcia & Larsen-Freeman, 1999:278)、カテゴリカルな意味と数量的な意味 (Quirk et al., 1985:275) などがあげられるだろう。(18)(19)の (zero) *stamps* や (zero) *pencils*、(21)の (zero) *women* はタイプ、クラス、カテゴリカルな解釈をもつが、(20)の *some stamps* と(22)の *some women* は数の制限が課され数量的な意味をもつ。言い換えれば、a (an)、*some* と zero 冠詞は、その名詞の可能な指示対象の部分か全体かで対立していると言える。

(18) I need *stamps*.

(19) These are *pencils*.

(20) I need *some stamps*.

(Celce-Murcia & Larsen-Freeman, 1999: 278)

(21) Joe's been chasing *women* ever since he was young.

(22) Joe's been chasing *some women* ever since he was young.

(Quirk et al., 1985:275)

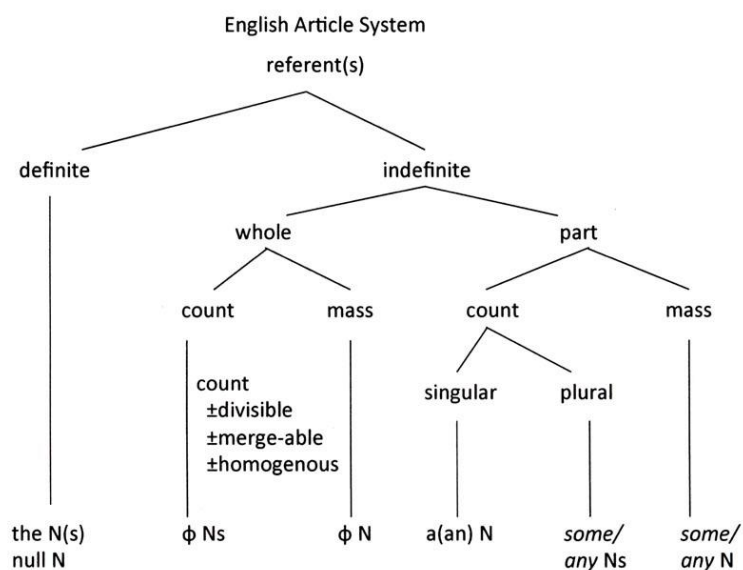
しかし冠詞の指導において、この次元の区別、すなわち zero 冠詞は、共起する名詞が表す対象の種類・クラス、可能な指示対象全体を指示していることを標示する機能を持ち、a (an), *some* は、共起する名詞が表す種類・クラスの一部を指示していることを標示し、そのためなんらかの数量的な意味合いを帯びていることについては、ほとんど扱われてこなかった。そのことが、zero 冠詞の存在それ自体についても、また意味・機能についての認識も十分に形成されてこなかった原因ではないかと考える。A (an)や *some* についても、名詞の可能な指示対象の集合全体から1つ、もしくは一部をとり出すという意味・機能が十分に理解されなかったのは、zero 冠詞との対比が明示的に指導されていないことが要因ではないかと推測している。

不定冠詞に関わる3つの次元の構造を考えると、COUNT/MASS と EXTENSIVITY の次元は交差分類的な関係である。しかし (15)で Swan(1984)が、最初に EXTENSIVITY の次元に相当するボックスをおいていることや、a (an), *some* が集合全体の中から任意の1つもしくは一部を取り出すという意味をもつことは、全体か部分かという EXTENSIVITY の次元があってはじめて成り立つことから、認識的には EXTENSIVITY の次元が COUNT/MASS の次元に先行すると考えるのが妥当なのかもしれない。

3節で述べてきたことをまとめると、次のようになる。英語の冠詞体系は、それぞれの冠詞が重層的な意味・機能を持ち、それらは複数の次元の二項対立によって決定している。その中で定・不定の次元は、談話の領域に置かれているという点で、それ以外の次元とは異なっている。COUNT/MASS の次元は、指示対象が \pm divisible、 \pm merge-able、 \pm homogenous かどうかで count か mass の判断が行われる。さらに COUNT の下位次元として

SINGULAR/PLURAL の次元がある。また COUNT/MASS の次元と EXTENSIVITY の次元は交差分類的であるが、認識的にはまず EXTENSIVITY の次元での判断が行われ、さらにそれぞれが COUNT/MASS の次元で区別されると考える。不定冠詞の指導にかかわる次元は COUNT/MASS、EXTENSIVITY、そして COUNT/MASS の素性である \pm divisible、 \pm merge-able、 \pm homogenous、そして COUNT の下位次元の SINGULAR/PLURAL となり、それらを教育内容とし、指導過程を構築することになる。本稿で考察してきた冠詞の次元構造を図にすると、(23)のようになる⁵⁾。ここで whole, part と書かれているのは EXTENSIVITY の次元の対立の呼び名である。

(23)



4. 指導過程

本節では、2 節と 3 節で考察した教育内容をもとに、不定冠詞を取り立てて指導する際の指導過程の構成を試みる。すでに述べたように、本研究での不定冠詞の教育内容の主要な点は、以下のとおりである。

- 1) 英語の不定冠詞は、a (an)、強勢のない *some* とその variant の強勢のない *any*、表層的には無形の zero 冠詞とする。

- 2) 英語の名詞はあらかじめ **count nouns** と **mass nouns** に分類されているのではなく、大多数の名詞が使用されてはじめて **count** か **mass** の解釈をもつ。
- 3) 英語の不定冠詞は、それを含む名詞句の指示対象の存在様態が、**count** であるのか **mass** であるのか (**COUNT/MASS** の次元)、**count** であるなら単数なのか複数なのか (**SINGULAR/PLURAL** の次元)、そしてその名詞で表すことのできる種類全体を指し示しているのか、その一部なのか (**EXTENSIVITY**) の判断結果を標示するという機能をもつ。
- 4) **Count** として使用されたときと **mass** として使用されたときの指示対象の存在様態の違いは、**±divisible**、**±merge-able**、**±homogenous** によって説明できる。

Count/mass が名詞の分類ではないことは、これまで学習者が得てきた、**desk** は数えられる名詞、**water** は数えられない名詞という認識をゆさぶり、後に続く冠詞学習の動機づけになる内容でもあるので、指導過程の最初におかれることが望ましい。3)ほどの対立軸から導入するのが学習者の認識形成過程にもっとも合致するかが検討されなければならない。すでに述べたように、認識的には **EXTENSIVITY** の次元が **COUNT/MASS** の次元に先行すると考えられ、指導の観点からも、集合の中から任意の個体を取り出すという **a** の本質的機能は、全体集合を想定して初めて説明できることであるので、**EXTENSIVITY** の次元から指導を行うということも考えられる。しかし本稿では、**COUNT/MASS** の次元から始め、その後に **EXTENSIVITY** の次元に進むという指導過程を考えている。**COUNT/MASS** の次元を指導する際に導入される不定冠詞は、**a (an)**と **some**であり、**zero**冠詞は登場しない。無形の **zero**冠詞に先立って有形の **a (an)**および **some**に接し、その意味・機能が、指示対象をなんらかの数量的な存在であることを標示するということを理解できれば、結果として **EXTENSIVITY** の次元での **zero**冠詞との対立が明確になると考えるからである。その結果 **a (an)**や **some**ではなく、そのスロットに **zero**冠詞を用いるのは、**a (an)**や **some**が持つ数量的な意味合いを消し去るという目的があることを学習者に伝えることができるのではないかと想定している。また **a (an)**と **some**により、名詞の前には冠詞のスロットがあることを認識

しておけば、zero 冠詞は、冠詞がないことを意味するのではなく、あるはずのところに目に見えない zero 冠詞が生起しているということが理解できるのではないかと考える。無形の不定冠詞を zero という呼び方で呼ぶのは、数学のゼロのように「もともと何もないのではなく、あるはずのところになにもないということに意味がある」(遠山, 1972:65)からである。

EXTENSIVITY の次元を後にするもう 1 つの理由は、これまで学習者が受けてきた英語学習において、種類全体か一部かの指導はほとんど行われず、学習者にとって新しい概念であると同時に、この次元が抽象的な思考を要求する次元だからである。日本語は、指示対象がその種類全体なのか、それともその一部なのかについて、英語が要求するような認識的区別をしていない。たとえば、(24)(25)のように「コンパスというもの」「車というもの」を表現するとき、日本語話者にとっては、不特定の複数のコンパスの集合を思い浮かべるよりも、ある 1 つのコンパスを思い浮かべる方が、また無数に多くの車ではなく、1 台もしくは数台の車を思い浮かべる方が自然なのではないだろうか。「1 個より様々な個体を想定するのが自然」(山下, 2013: 48) なこととして思い浮かべることができることが、EXTENSIVITY の次元の指導が目指すことなのかもしれない。

(24) Compasses are magnetic and point to the Earth's magnetic north.

(25) They sell cars.

それぞれの次元の中での指導順序については、COUNT/MASS の次元では、日常的に count にも mass にも用いられる具象的な名詞 (cake, lamb, banana など) を用いて \pm divisible、 \pm merge-able の区別および SINGULAR/PLURAL の区別や MASS の場合の名詞の語尾の意味を導入する。そこで count/mass の区別を把握できた後に引き続いて difficulty など、概念的な境界を想定することではじめて count と解釈される名詞を扱うという進み方を想定している。

EXTENSIVITY の次元については、この次元に先立って、a (an) と some を学習しているので、それらの冠詞と zero 冠詞の意味を対比できることが目標と考えている。例えば、(21)(22)(26)の意味の違いを理解できることである。

- (21) Joe's been chasing *women* ever since he was young. (再掲)
(22) Joe's been chasing *some women* ever since he was young. (再掲)
(26) Joe's been chasing *a woman* ever since he was young.

しかし、それに先だって、指示可能な対象の全体集合という概念をどう教えるかという問題がある。(21)と(22)(26)が異なることがわかったとしても、そのことが必ずしも、指示可能な対象の全体集合という概念の形成を意味しない。zero 冠詞が生起している場合は、その名詞の指示可能な対象の全体集合、言い換えればその名称で呼ばれる種類・カテゴリへの指示が行われていることを明示的に指導する必要がある。その具体的な方法として筆者が目下検討しているのは、次のような方法である。

学習者に「車」の絵を描いてもらう。その時点ではそれは a car ではない。クローズ(1980)の言うように単なる概念の car でしかない。しかしそれを集めて黒板にすべて貼ると、cars となる。その絵の数をいくら増やしていても cars と表現される。そこから1枚を選ぶと、その絵の下には a car と記載される。そこから何枚か選ぶと some cars と記載される。

そのようにして car という名詞で表される存在全体、すなわち car と呼ばれる「ものの種類」は cars と表現され、冠詞として、表層的には無形の zero 冠詞が生起していることを示していけるのではないかと考えている。

5. まとめと今後の課題

本稿は、3 節において、不定冠詞の教育内容として、以下のことを提案してきた。

- 1) 英語の不定冠詞は、a (an)、強勢のない *some* とその variant の強勢のない *any*、表層的には無形の zero 冠詞とする。

- 2) 英語の名詞はあらかじめ **count nouns** と **mass nouns** に分類されているのではなく、大多数の名詞が使用されてはじめて **count** か **mass** の解釈をもつものとして扱う。
- 3) 英語の不定冠詞は、それを含む名詞句の指示対象の存在様態が、**count** であるのか **mass** であるのか (**COUNT/MASS** の次元)、**count** であるなら単数なのか複数なのか (**SINGULAR/PLURAL** の次元)、そしてその名詞で表すことのできる種類全体を指し示しているのか、その一部なのか (**EXTENSIVITY** の次元) によって、意味と機能を説明できる。
- 4) **COUNT/MASS** の次元では、**count** として使用されたときと **mass** として使用されたときの指示対象の存在様態の違いを、 \pm **divisible**、 \pm **merge-able**、 \pm **homogenous** によって説明すること。そしてこれらの二項対立は英語を母語とする話者にのみある発想ではなく、数学の分離量・連続量と共通する普遍的な対立であること。
- 5) **SINGULAR/PLURAL** の次元を **COUNT** のサブカテゴリーとすること。そのことにより **MASS** の場合の単数形式は「1つ」の意味ではないことが明確になること。

英語の **count/mass** の区別は、日本人学習者にとってむずかしいものと考えられがちだが、数学における分離量と連続量の違いは日本語・英語にかかわらず普遍の概念であり、学習によって理解することができ、実際の生活でも使っている区別である。従って「数えることができるものとはどういうものか」という観点から指導することにより、**count/mass** の区別の根幹が理解できると考える。もっとも基本的な **count**、**mass** それぞれの存在様態を理解することで、抽象概念の個体化 (**a difficulty**, **a knowledge** など) も理解していけるのではないかと考える。

これらの教育内容をもとに指導過程を構想していく際に、**COUNT/MASS** の次元と **EXTENSIVITY** の次元のどちらを先に導入するかを検討を行った。認識的には **EXTENSIVITY** の次元の区別が一義的かもしれないが、指導という観点からは、**COUNT/MASS** の次元とその下位次元である **SINGULAR/PLURAL** の次元の指導が先立つと考えた。

このような教育内容と指導過程を実際の英語教育に適用するためには、どのような方法で授業を構成していくか、どのような例を用いて学習者に提示していくかが次の大きな課題となる。現在試験的に作成した授業プログラムを実施しながら質問や説明の内容を検討しているところであり、最終的にはいくつかの評価方法を用いて、学習者の不定冠詞使用への理解を評価することで、本稿で考察してきた教育内容や指導過程、授業構成の評価を行なう必要がある。また本稿では扱わなかった定・不定の次元も組み込んだ冠詞体系全体の授業過程の構築を行い、その上で、英語学習者が冠詞を理解し、それにより自分の伝えたいことを伝えたいように伝えることのできる英語の使い手になることを目指して、冠詞体系全体の授業プログラムを作成していくことをこれからの課題としている。

注

- 1) 名詞が複数形式である場合は、その名詞句の指示対象が **count** であることが示されるが、その場合も冠詞 **the** が **count** であることを示しているのではない。
- 2) Carlson(1977)は、数量詞の **some** と区別するために、**sm** と表記している。
- 3) このことについては本セクションの後半で数学との関連において詳しく述べる。
- 4) Bloomfield (1930:205)が **unbounded nouns** の特徴として、「さらに細かく分けることもしくは合併することができる」と述べていることが、Yotsukura(1970:69)で言及されている。
- 5) 本稿では **indefinite** に焦点を当てているため、**definite** と判断されてからの分類の詳細は記していない。

引用文献

- Allan, K. (1980). Nouns and countability. *Language* 56, 541-567.
- Bloomfield, L. (1933). *Language*. New York: Henry Hold & Company.
- Carlson, G. (1977). A unified analysis of the English bare plural. *Linguistics and Philosophy* 1 (3), 413-456.

- Celce-Murcia, M. & D. Larsen-Freeman (1999). *The grammar book*. Boston, MA: Heinle & Heinle.
- Chesterman, A. (1991). *On definiteness: A study with special reference to English and Finnish*. Cambridge University Press.
- Christophersen, P. (1939). *The articles: A study of their theory and use in English*. Copenhagen: Einar Munksgaard.
- Downing, A. (2015). *English grammar: A university course*. London: Routledge.
- Hewson, J. (1972). *Article and noun in English*. The Hague: Mouton.
- Huddleston, R. (1984). *Introduction to the grammar of English*. Cambridge University Press.
- Huddleston, R. & Pullum, G. K. (2002). *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge University Press.
- Jespersen, O. (1924). *Philosophy of grammar*. London: Allen & Unwin.
- Leech, G. & Svartvik, J. (1975). *A communicative grammar of English*. London: Longman.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Swan, M. (1984). *Basic English usage*. Oxford University Press.
- Wierzbicka, A. (1988). *The semantics of grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Yotsukura, S. (1970). *The articles in English*. The Hague: Mouton.
- クリストファセン, P. 一色マサ子訳述 (1958). 『冠詞』. 東京: 研究社.
- クローズ, R. A. (1980). 『クローズ 現代英語文法』. 齋藤俊雄訳. 東京: 研究社出版.
- 織田 稔 (1982). 『存在の様態と確認-英語冠詞の研究-』. 東京: 風間書房.
- 織田 稔 (2002). 『英語冠詞の世界 英語の「もの」の見方と示し方』. 東京: 研究社.
- 織田 稔 (2007). 『英語表現構造の基礎-冠詞と名詞・動詞と文表現・句型と文構造-』. 東京: 風間書房.

- 須田勝彦.(1993). 「量概念をめぐって」『教授学の探究』, 11号, (pp.33-44).
- 遠山 啓.(1959). 『数学入門 (上)』. 東京: 岩波書店.
- 遠山 啓.(1972). 『数学の学び方・教え方』. 東京: 岩波書店.
- 山下理恵.(2013). 「科学英語文法覚え書き (冠詞について)」『表面科学』, Vol. 34, No. 1, (pp.46-49).
- 安井 稔.(2014). 『英語とはどんな言語か より深く英語を知るために』.
東京: 開拓社.
- 安武知子.(2009). 『コミュニケーションの英語学 話し手と聞き手の談話の世界』. 東京: 開拓社.